色彩教材研究会通信　No.403　2024.8.15

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●研究会名簿のアップデート

お盆休み、いかがお過ごしでしょうか。こちらは実家の長野市に帰省中です。

色彩教材研究会会員のみなさまに対して、会員名簿のアップデートを実施します。

＜名簿アップデートの目的＞

①メールの不通を無くすため。（研究会通信や総会関連情報などのメールを会員全員に届けたい。）

②色彩教材研究会での活動をさらに促進するため。例えば、専門分野の情報を入力いただくことにより、チームによる活動の企画を促進したい。地域情報を活用することにより、これまでの首都圏・オンラインのみでの活動の幅を全国に広げたい。など上記は一例となりますが、今後の色彩教材研究会活動の土台になるものと考えております。

これから研究会に入会される方にも下記リンクより入力いただき、幹事会での審査を経て入会許可とさせていただきます。（日本色彩学会会員は研究会「正会員」に、非学会会員は「準会員」となります。）

＜以下のリンクより、お手続きをお願いいたします。＞

https://forms.gle/jT8wpeNPpetV3kkC7

（吉澤陽介　主査より：004）

●井原西鶴の好色一代女から

井原西鶴「好色一代女」は、二十四人の女性の告白を二十四編の草子物語にまとめた好色本である。その中に 123 の色名の用例が見られる。女性の着物や装身具の用例から選んで見ると、「天色の昔小袖」、「紅（モミ）返しの下着」、「箔型の白小袖」、「金作りの木脇差脇差」、「緋縮緬の二布物」、「中紅の蒲団」、「黄唐茶」、「紅の袴召たる女藺」、「櫻鹿子」、「紫鹿子」、「菖蒲八丈」、「紅の隠し裏」、「紅の片袖」、「紺地の今織後ろ帯」、「紅の片袖」、「紫の抱き帯」、「紺染の無紋」、「黒き大幅帯」、「赤前垂れ」、「木綿浅黄の単」、「白き肌帷子」、「地紅に御所車の縫いある振袖」、「白羽二重白の下紐」、「薄玉子の帯」、「赤根の襟」、「薄色の前垂れ」、「着る物は薄玉子」、「帯は鼠色」、「紺の大振袖」、「白木綿の帯」などがある。

また、肌の色や、髪や髭や化粧の表現に含まれる色名は、「恋に色青ざめて」、「色は薄花桜」、「歯並みあらあらとして白く」、「置墨濃く」、「歯黒付けたる口」、「烏羽玉の髪」、「赤面して」、「色白にして」、「口紅塗りくり」、「朱唇」、「伊勢白粉」、「土白粉」、「眉の置き墨」、「色青く」、、「硯の墨に額の際をつけ」、「口紅を光らせ」、「白髪に添え髪して」などが見られる。

（永田泰弘）

● 万葉集のなかの色 -15

夏まけて　咲きたるはねず　ひさかたの
　雨うち降れば　うつろいなむか
大伴宿禰家持 (巻 8-1485)

わが屋前の　石竹の花　盛りなり
　手折りて一目　見せむ児もがも
大伴宿禰家持（8-1496)

夏の野の　繁みに咲ける　姫百合の
　知らえぬ恋は　苦しきものそ
大伴坂上娘（巻 8-1500)

ほととぎす　鳴く峯の上の　卯の花の
　厭きことあれや　君が来まさむ
小治田朝臣広耳（巻 8-1501)

吾妹子が　家の垣内の　小百合花
　後と言えるは　不欲といふに似る
紀朝臣豊河（巻 8-1503)

万葉集の歌の中に、花が詠まれている場合は、その花の色が、念頭にあると考えてもいいと思う。冒頭のはねずを「ニワウメか、色名として朱華と書く。紅色でうつろいやすい」と注にあることから、朱華色は、淡紅色または白色の花をつけつけ実は赤色に熟し食べられるバラ科のニワウメの花か実の色が想定できる。石竹（ナデシコ)、百合、卯の花色も古くから古く認識されていただろう。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘）